オノマトペの意味・使用法の地域的差異

川﨑　めぐみ

1. はじめに

方言オノマトペの研究は、共通語におけるオノマトペ研究と同様、語形や文法の分野から始まった。共通語と異なり、資料が乏しい中でのスタートであったが、地域の方言辞典や方言集、談話資料の充実、また全国調査が実施され、ようやく方言オノマトペの語形や文法的特徴などが見え始めてきている。その中で近年、語や文法のレベルをこえ、オノマトペの発想法が東西で異なるという見方が出てきた。小林（2010）では、泣く様子を表すオノマトペの全国調査を通し、東日本では描写性を重視し、多様な語形が存在するのに対し、西日本では概念化されたオノマトペが多い、あるいはそもそもオノマトペが使用されにくいという指摘をしている。

本稿では、このような発想法に関する東西差という視点から、談話資料などにおけるオノマトペの用法をもとに、その表現の特徴を具体的な用例から見ていく。そのことを通して、方言オノマトペの意味・用法の東西方言の違いを明らかにしていくことを目指す。

2. 先行研究

オノマトペ表現の特徴の東西差という点については、先述した小林（2010）が「大声で泣く様子」を表すオノマトペを全国調査し、地図化している（小林2010:43，図4）。この地図では、オノマトペによる表現をした地点が東日本に偏っている。

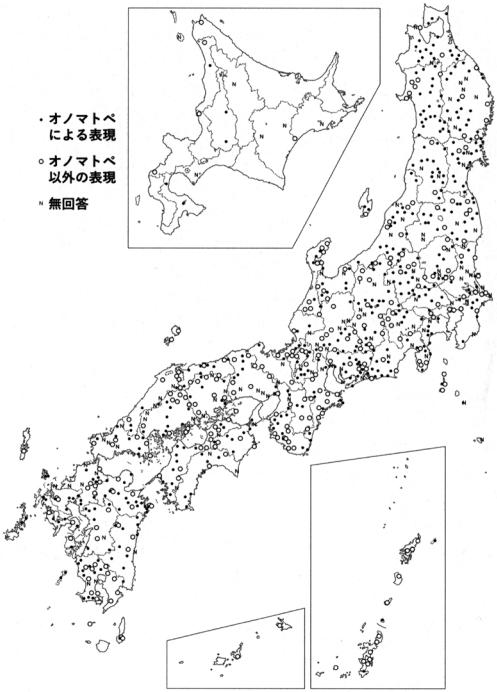


図４「大声で泣く様子」のオノマトペ―オノマトペ自体の有無

オノマトペ以外の「オーゴエデ」「ヒドク・ヒドー」などの一般の副詞による表現、また「オメク」「イガル」などの動詞による表現が西日本に偏っている。このことから、小林（2010）は、オノマトペの表現について、次のように述べている。

> オノマトペによる表現は、状況をリアルに映し出すものであり、現場性の強い表現であるといってよい。いっぽう、副詞句や形容詞、動詞による表現は、現象をいったん概念化した上で言葉に表すものであり、現場から一歩引いた位置に立つ表現であるといえる。その点で、前者は直接的な表現、後者は間接的な表現とみなすこともできる。
>
> このようなことを考えると、オノマトペ使用の有無は、表現に関する志向性、あるいは言語的な発想法の違いという、より大きな問題に発展する可能性がある。すなわち、東日本、特に東北地方は現場性の強い直接的な表現が好まれるのに対し、西日本は現場性の弱い間接的な表現が志向される、といった違いが一般化できるならばおもしろいだろう。（44,45頁）

一方で、友定（2015）では、関西においてオノマトペが多用されるという直観があることを指摘し、関西におけるオノマトペの多用の直観は、実際のオノマトペの多さではなく、関西人の話し方の特徴に関わるとしている。関西人の話し方の特徴は、「現場性を大事にし、はじらうことなく、生き生きと描写することを好み、また、場面を共有することで、話す人と聞く人の距離を近くする点にあると言われて」おり、その効果を上げるためにオノマトペが有用であるため、オノマトペの使用が好まれるという指摘である。

「現場性」という点は、さきの小林（2010）における東北地方のオノマトペの特徴と重なる。しかし、小林（2010）では、西日本では間接的な表現が好まれるとしており、ここに「現場性」の扱いのずれがあるように思われる。

ここに留意しつつ、本稿ではまず国立国語研究所による『方言談話資料』を用い、全国のおおまかな地域差の傾向を見る。そして、その傾向が顕著に表れるのはどこなのかを探っていく。そのうえで、方言の談話資料を中心に、東日本と西日本のオノマトペの特徴的な用例を見ることで、オノマトペの表現に関する意識や発想の傾向を明らかにしていきたい。

なお、取り上げる地域は、東日本についてはオノマトペが特に多用されると言われてきている東北地方、西日本においては関西を中心に見ていくこととする。

表1
『方言談話資料』のオノマトペ語数

都道府県	出現語数
青森	55
岩手	58
宮城	33
山形	44
新潟	36
群馬	56
千葉	25
長野	38
静岡	53
愛知	38
福井	52
京都	33
奈良	30
鳥取	54
島根	58
愛媛	10
高知	62
長崎	33
宮崎	25

3.『方言談話資料』から見る地域差

『方言談話資料』は、1978~1987年に刊行された全10巻から成る談話資料である。20府県の談話が収録されているが、府県によって長さはまちまちであるが、かなりの分量の談話が収められている県もある。

三井・井上（2007）は『方言談話資料』より後に刊行された『全国方言談話データベース』に現れるオノマトペを収集している。川﨑（2017）では、『方言談話資料』のオノマトペの1ページごとの出現頻度を三井・井上（2007）の調査結果（頻度順位）と比較したが、表2のとおり、出現頻度については特に傾向は見いだせなかった。

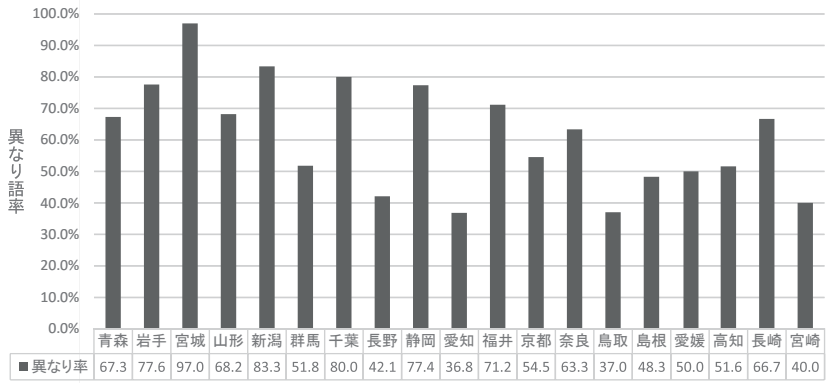
表2　『方言談話資料』のオノマトペ頻度順位

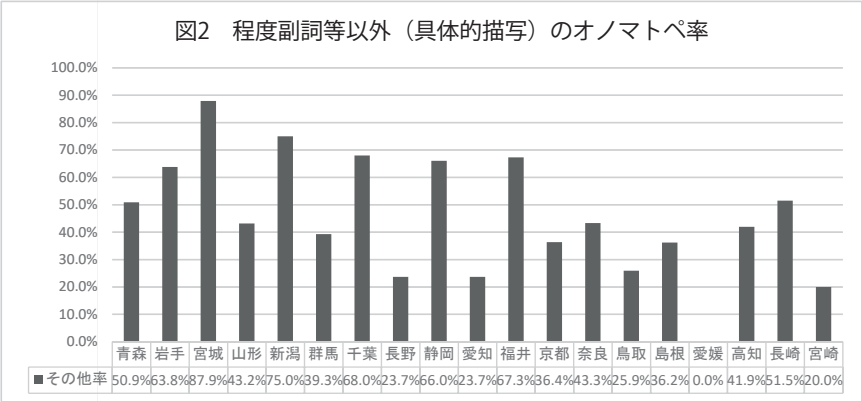
順位	府県	1頁出現頻度	『全国～』の頻度順位
1	宮城県	0.71	11
2	島根県	0.65	41
3	鳥取県	0.65	24
4	千葉県	0.62	20
5	青森県	0.58	7
6	高知県	0.56	1
7	岩手県	0.54	30
8	福井県	0.53	4
9	愛知県	0.50	17
10	群馬県	0.49	24
11	山形県	0.45	3
12	長野県	0.45	43
13	宮崎県	0.44	30
14	静岡県	0.43	41
15	新潟県	0.41	30
16	長崎県	0.39	ー
17	愛媛県	0.38	11
18	奈良県	0.34	16
19	京都府	0.30	7

※三井・井上（2007）で長崎県は調査対象外

しかし、図1のように異なり語で見てみると、若干ではあるが、東西の差が見えてくる。特にページ当たりの出現語数が3位の鳥取県は、異なり語数の割合が37％と低くなっている。6割以上が繰り返し使用されている語ということになる。鳥取県の話者の1人が、「ズット」（6回）、「ズーット」（4回）、「ズート」（2回）など、仁田（2002）の分類で時間関係の副詞とされるオノマトペらしくない語を繰り返している。この「ズット」系統のオノマトペは、由来からするとオノマトペではないともされるが、このような準オノマトペとでもいうべき語が多く見られるのが、西日本の特徴である。この特徴は、図2の程度副詞等以外のオノマトペの割合を見

図1 『方言談話資料』県別異なり語の割合

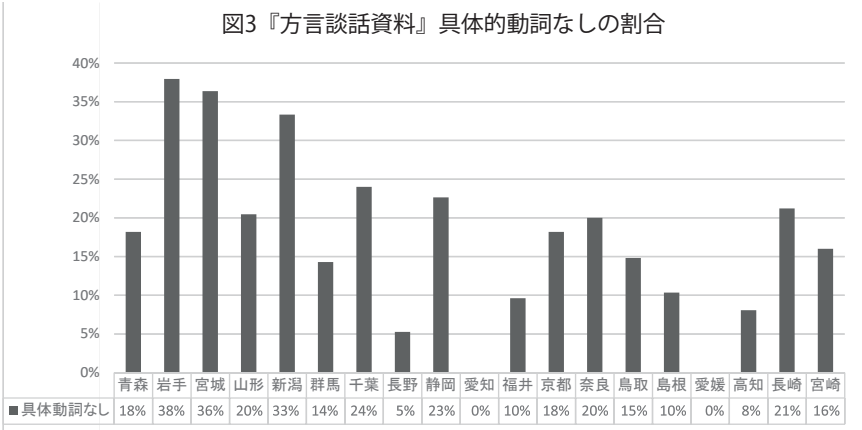




ると、さらによくわかる。程度副詞等とは、「ちょっと」や「うんと」といった量に関わるものや、「ずっと」などの時間関係の副詞として用いられているオノマトペである。図2は、これらを除いた具体的な様態を表すものの割合（その他率）を示している。

具体的な様態を表す、すなわち具体的な描写を行うオノマトペが東日本、特に東北地方に多く見られるという傾向は、小林（2010）の指摘に合致する。逆に言えば、西日本では出現語数や出現頻度では東日本とそれほど差はないものの、定型化した語を繰り返し使用する、あるいは程度副詞などの一般語寄りのオノマトペが多用されていると考えられる。

これに加えて、東日本、特に東北地方のオノマトペの用法に特徴的なのが、オノマトペの後に続く動詞などの被修飾語についてである。図3は、「する」「なる」「いう」「くる」といった抽象的な動詞に係るもの、また形容動詞化したもの、被修飾語が伴われな



い例の割合を示したものである。

図3のオノマトペによって修飾される具体的な動作等を表す動詞の有無は、動詞が表現の主体となる西日本と、オノマトペ（副詞）が主体となり、動詞や形容詞的な役割を果たして表現の中心となる東日本という特徴を浮かび上がらせる。西日本ではあくまで補助的な副詞であるのに対し、東日本ではオノマトペのみですべてを説明しようとしていると見ることもできるかもしれない。

他の談話資料等も見てみる必要はあるが、『方言談話資料』のオノマトペの使われ方からは、次の3点が言える。

① 東日本（特に東北）で多彩なオノマトペが使われている。
② 西日本では程度副詞化したオノマトペが比較的多い。
（オノマトペと一般語の中間的なオノマトペ）
③ 東日本（特に東北）では、「する」「なる」「いう」などの抽象的な動詞に係るもの、「って」「と」などで発話を終えて修飾する動詞を持たないものが比較的多い。

4. 談話資料などの用例から見る地域差

では、このような特徴は用例としてどのように表れているのか。主に東北地方の例と関西の例を比較しつつ、その特徴を明らかにしていきたい。

4.1 東日本（主に東北地方）のオノマトペの特徴的な用法

まず、東日本（東北地方）のオノマトペの例である。(1)(2)は、東日本大震災後に宮城県の津波被災地である15市町の談話を記録した『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』からの例である。どちらも地震で大きく揺れた場面を表している。

(1) ジシン　ンダガーット　キタッチャ。（地震　ダガーって　きたよね。）
（自由会話「震災のときのこと」東松島市001A）

(2) ホンデ　ガダガダナッタガラ、（それで　ガタガタ［ト］なったから、）
（自由会話「震災のときのこと」名取市004A）

(1)(2)とも、「揺れる」と使わず、「きた」「なった」という抽象的な動詞に係っており、動詞を修飾しているというよりも、動詞が添えてあるだけで、表現の中心がオノマトペとなっている。次の(3)は、山形県の民話の例で、「いた」という動詞が後ろにあるものの、「チュン、チュン、チュンと」の部分が「いた」を修飾しているのではなく、付帯的状況を表す用法となっている。

(3) 雀こぁ、チュン、チュン、チュンと、いたじょん。
（『笛吹き聟』p.120「舌切雀（雀のむかし）」）

次の(4)(5)は、オノマトペで文が終わっている例である。こちらも『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』の例である。

(4) ホナノ　ズスンデ　ンノー　シャンデリア　ザク゛ザク゛ザク゛ザク゛ザク゛ド。イッペ　ユレデッサ（そんなの　地震で　あの　シャンデリア　ザグザグザグザグザグと。いっぱい　揺れてさ）

（自由会話「震災のときのこと」南三陸町020B）

(5) 013B：アンブラカンカ゛、ヒックリゲッテ。タンク。ホデ　パクパッコンブクブクと。（油缶が、ひっくり返って。タンク。それで　パクパッコンブクブクと。）

014A：アブラ　デデンダワ。（B　マズ）ナカ゛レッタノ。

015B：ウン、ナカ゛レッタノ。

（自由会話「震災のときのこと」名取市013B～015B）

オノマトペ＋後接辞「ト」の形で文が終わっている。関西に見られると指摘されている文末用法（「ボチャーン。猫落ちよってん」のような、独立した用法）に似ていなくもないが、特徴的なのは、文末用法が同じ発話者によって発話が継続されるのに対し、(4)(5)は相手に発話権が移るという点である。特に(5)のように、「デデンダワ」「ナカ゛レッタノ」と動詞を補っていて、伝達内容を受け取ったと表示しているようにも見える。

極端な例では、次の (6) の例のように、ほとんどオノマトペのみで発言されることもある。オノマトペが主役となっているのがわかる。(6) は、筆者の出身地である山形県寒河江市方言での作例である。

(6) きんな田んぼ道あらてだっけごんたら、雪ボダボダてきて、ゴダゴダんどごさビッヂャリいっては、ヤチャクチャなぐなったっけんだずは。もうダラダラだは。（昨日田んぼのあぜ道を歩いていたら、ぼた雪が降ってきて、泥のところに足を踏み込んでしまって、どうしようもなくなってしまったんだよ。もうびしょ濡れだ）

このように東北地方では、被修飾動詞が抽象的、あるいは伴われない例が特徴的であり、動詞を修飾する副詞的な性格よりも、オノマトペ単独で状況を描写しよう、あるいは相手に伝達しようとしているように感じられる。目の前にあるものや、過去の状況を、直接的にオノマトペで写し取ろうとする態度がある。状況説明をオノマトペが担っているという点に特徴があると言える。

4.2 西日本（特に関西地方）のオノマトペの特徴的な用法

続いて、特に関西地方のオノマトペの特徴的な用法を見ていく。(7) は『全国方言談話データベース』の和歌山県の例である。この「ウワーット」「バーテ」の例のように、関西では描写の具体性よりも、勢いを重視した表現がよく使われている。

また、「ヒヤヒヤシマシタ」のように、スル動詞化した慣用的な（定型的な）表現も、東日本に比べると多い。なお、「ヒヤヒヤ」は「冷や」からの転とも考えられており、純粋なオノマトペではないと捉えることもできる。どちらにしても、具体的な描写性を備えたオノマトペではない。

(7) 269A：ウワーット　ソイカラ，{笑} モ　カナラズ　マエー　バーテ　コーツッコムワケデスヨ.
(B　ツライワー)　ンナ　モー　コトシラネー　モー　ヒヤヒヤシマシタ.　(D　アー) ヒヤヒヤシタネ.
(『全国方言談話データベース』和歌山県)

この点について、一般の情報雑誌の内容ではあるが、(8) のような興味深い指摘がある。「関西人あるある」というテーマで投稿された内容である。

(8) 念押ししたいときに擬音で迫る！　「これしょうゆ落としたらおいしいで！ポトンと！」「そこ糸出てるし切ったげよ！　チョキンと！」てぐあいに (笑)。遠慮がちなときは、擬音だけ間をおいて言う。「ごめん、これちょとやっといてくれる？……ブワァーッと」　(ワーママ×ワンオペ y.u.gohan)
確かに擬音多い！「そこガーッと行って、どんつきガッと曲がってから細い路地ヒュッと入ったとこ」とかね。慣れた仲やと、ほぼ擬音だけでしゃべってることある。
(「山本ゆりのもしあれだったら読んでって。～今月のテーマ：関西人あるある」『サンキュ！』2021年6月号,p.130)

投稿者が「念押し」と表現しているところが注目される。友定 (2015) で、「現場性を大事にし、はじらうことなく、生き生きと描写することを好み、また、場面を共有することで、話す人と聞く人の距離を近くする」という特徴が示されていたが、相手との情報共有にオノマトペが用いられているということである。オノマトペを示すことで、「わかるよね」という共感が図られている。

投稿者への山本さんのコメントにある「ガーッ」「ガッ」「ヒュッ」などは、(7) の「ウワーッと」「バーテ」と同様の用法である。1拍語基のオノマトペは、意味が比較的あいまいなことが多い。あいまいだからこそ、情報共有の幅が広いとも言えるかもしれない。

東北との対比としては、動詞を中心として、オノマトペはあくまで修飾語としての役割を果たしている。基本的に被修飾語となる具体的な動詞が伴われており、オノマトペが担う意味は東北に比べると比較的軽い。そのためか描写よりも勢いや程度を表す用法がよく見られる。一方で、スル動詞化したオノマトペや、一般語彙との境界にあるオノマトペも多用され、概念化した表現が好まれている。

4.3　東西のオノマトペの用法の違い

以上をまとめると、次のようになる。

東北のほうは、描写したものをそのまま直接的にオノマトペ化して表現する。その結果、多様な語形が出てくる。さらに、描写対象に即した動詞が見つからず、被修飾語となる動詞が選ばれないまま発話されることがある。これを会話の相手が補うことも多い。動詞が担うべき部分が、オノマトペだけでも許されてしまう。幼児の発話あるいは育児の場面で見られる発話に近い点もある。

西日本では、同じ語が繰り返し使われ、勢いを表すためにいくつかの語が、無声化、音量の変化、長音化など強調的するための音声の特徴とともに発される。勢いを表す語以外では、動詞が伴われないことが少なく、文法的には整合的な使われ方がされている。オノマトペは臨場感を出すために使われるが、あくまで脇役の位置にある。

2021年6月に行われた第58回表現学会全国大会シンポジウムの質疑応答において、東日本は説明のためのオノマトペ、西日本は共感のためのオノマトペなのではないかという指摘があった。まさしくそのとおりで、特に東北地方では、描写対象を具体的に直接描写するという発想があるのに対し、西日本は相手も知っている語を使用することで相手との共感を図るためにオノマトペが用いられていると言える。

5. まとめと今後の課題

オノマトペの地域差について、本稿では『方言談話資料』などの談話資料を通して、その特徴の一端を明らかにし、場面の直接的描写や説明を中心とした東日本に対し、相手への共感や情報共有を目的とした使用をする西日本という傾向があることを指摘した。今回は談話資料ということで用例数が限られており、さらに用例数を増やしての検討が必要である。これを今後の課題としていきたい。

参考文献

臼田甚五郎監修・野村順一編（1968）『笛吹き聟 最上の昔話』東出版
川﨑めぐみ（2017）「『方言談話資料』におけるオノマトペの地域的差異についての考察」『名古屋学院大学ディスカッションペーパー』120
国立国語研究所編（1978-1987）『方言談話資料』全10巻　秀英出版
国立国語研究所編（2001-2008）『全国方言談話データベース ふるさとことば集成』全20巻国書刊行会
小林隆（2010）「オノマトペの地域差と歴史 ―「大声で泣く様子」について―」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』ひつじ書房
東北大学方言研究センター（2013）『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集―宮城県沿岸15市町―』
友定賢治（2015）「感性の表現の地域差 ―オノマトペで考える―」『表現研究』102
仁田義雄（2002）『新日本語文法選書3　副詞的表現の諸相』くろしお出版
三井はるみ・井上文子（2007）「第2章 方言データベースの作成と利用」小林隆編『シリーズ方言学4 方言学の技法』岩波書店

付記

本稿は、第58回表現学会全国大会シンポジウムで報告したものである。席上、オンライン開催にもかかわらず、多くの方から貴重なご意見を賜った。記して御礼を申し上げます。

（名古屋学院大学）